中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連

五十嵐 哲也* 萩原 久子**

本研究では、中学生の不登校傾向と幼少期の父母への愛着表象との関連を検討した。480名の中学生を対象とし、以下の結果が得られた。1)「別室登校を希望する不登校傾向」は主に母親の「安心・依存」と「不信・拒否」,「遊び・非行に関連する不登校傾向」は両親への「安心・依存」と「不信・拒否」が関連していた。また,「在宅を希望する不登校傾向」では異性親への「安心・依存」と「不信・拒否」が関連していた。一方,「精神・身体症状を伴う不登校傾向」は,「分離不安」との関連が強かった。2)女子では,幼少期の母親への愛着がアンビバレントな型である場合や,父母間の愛着にズレが生じている場合に不登校傾向が高まる傾向が示された。女子はこうした家族内における情緒的不安定性への感受性が強く,不登校傾向を示しやすいと見える。3)男子では,「在宅を希望する不登校傾向」得点が高く,幼少期の父母両者に対する愛着の「不信・拒否」と関連があることが特徴的であった。これは青年期以降の社会的ひきこもりに見られる状況と一致しており,登校しながらも在宅を希望している男子の中に,思春期時点ですでに同様の傾向が示されていると言える。

キーワード：不登校傾向, 愛着, 中学生, 幼少期

問題と目的

本研究は,昨今の多様化する不登校状態を踏まえ,その予防的援助のためには幼少期からどのような親子のかかわりが重要であるのかを検討するために,幼少期の父母への愛着と様々な不登校傾向の様相との関連を明らかにすることを目的とする。

文部科学省学校基本調査(2003年8月)では,平成14年度間の「不登校」による長期欠席者数は約13万1千人であるが,調査開始以来,初めて減少したとされる。この減少に関する要因の一つとして,不登校状態の多様化が挙げられる。従来,不登校状態の分類は,小泉(1973, 1988)や文部省(1988)の分類が指標とされてきた。しかし,石川(2000)は,それらに当てはまらない現代型の不登校に注目し,自験例の分析から「医療型」「在宅自閉型」「在宅解放型」「非在宅校内型」「非在宅校外型」「犯罪非行型」に分類している。このうち「非在宅校内型」は登校後に保健室や相談室などの別室で過ごすもので,「非在宅校外型」は登校しても授業に出ずに友人らと遊ぶことが多いもの,「在宅解放型」は自宅にいるがひきこもることもなく,友人らが遊びに来

れば受け入れるものである。石川(2000)はこれら3つの状態像が現代型と称される不登校で,近年はこれらの状態像を示す生徒の割合が増加していると述べている。なかでも,「非在宅校内型」に分類される別室登校は,登校しているために従来の分類では不登校に含まれない。したがって,別室登校を行う児童生徒の割合の増加は,総じて従来の分類による不登校児童生徒数の減少に結びついている可能性が高い。

このように,不登校そのものの多様化が進む中で,登校していながら欠席願望や登校回避願望がある児童生徒も相当数存在することが従来の研究で明らかにされている(e.g., 森田, 1991; 本保・佐久川, 1993)。登校しつつ登校回避願望がある状態は,不登校に至らないまでも学校生活を楽しむことに困難が生じており,不登校の前駆的状态として,「不登校傾向」であると考えられる。しかし,これまでの不登校傾向に関する研究では,欠席願望や登校回避願望を単一の項目で測定することが多く,先に挙げたような近年増加しつつある多様な不登校の様相を反映した状態を明らかにすることはできない。この観点から,五十嵐・萩原(2002)は不登校傾向尺度を開発し,中学生の不登校傾向が「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」の4つの構造をもつことを見出した。このように不登校傾向の多様な様相を把握し,その関連要因や援助を検討していくことは,不登校傾向

* 筑波大学大学院博士課程教育学研究科
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
tetsuiga@yahoo.co.jp

** 広島県/広島市スクールカウンセラー
hisa_hagi@yahoo.co.jp

の低減や不登校の予防的側面から重要であろう。

ところで、不登校傾向は学校不適応状態の1つであるが、最近になってこうした学校不適応と、親子間の愛着や、それを基礎として形成される内的作業モデルとの関連を検討した研究がなされてきている。例えば、粕谷・菅原(2001)は中学生の内的作業モデルと学校生活満足度との関連を検討し、secure得点が高いことは学校生活の中で承認されていると認知することに関わっており、ambivalent得点が高いことは不適応感を持つことに関わっているということを示している。また、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)は、酒井(2001)の青年期の愛着関係における信頼感を測定する尺度を改変して用い、中学生の父母や親友との信頼関係が学校適応感にどのように関連しているかについて親子相互評定によって検討している。

愛着理論では、幼少期における特定の対象への愛着が内的作業モデルを形成し、その後の対人関係を規定すると考えられている。Bowlby(1969,1973)は、愛着は母性的人物に対する子どもの絆であり、母性的人物をある結果をもたらす対象とみなして接近しようとする行動システムの所産であると述べている。そして愛着は、行動レベルから表象レベルへと発達し、主要な対象との関係に関する確信や表象で安心感が得られるようになる。これが内的作業モデルあるいは表象モデルであり、これらのモデルの個人による相違が他者に対する一般的な対人関係の構築を規定し、愛着行動は青年期以降も持続して危機的状況下において増大するとされる。実際、岡部(2001)は、愛着スタイルと中学生の現在の親子関係や友人関係のあり方について分析し、思春期の親子関係において愛着の影響が持続してみられ、友人関係についても愛着スタイルごとに特徴があることを明らかにした。さらに中学生以降についても、様々な臨床症状や適応指標、発達指標と愛着との関連が実証されている(e.g., Jong, 1992; 鳥丸, 2001; Koon, 1997; Zimmermann & Becker-Stoll, 2002)。したがって愛着は、中学生にとって危機的状況であると考えられる学校不適応感に関与していると予測されるほか、具体的な学校不適応状態の1つである不登校傾向とも関連があると考えられる。

また、これまでの学校不適応感と愛着および内的作業モデルとの関連を検討した研究では、その時点での親への愛着や、その時点で既に形成されている内的作業モデルを測定しているものが多い。しかし、佐藤(1993)は、回想法によって明らかにされた青年の幼い頃の愛着に対する表象、すなわち愛着歴の表象を重視

し、対人的構えとの関連について中学生、高校生、大学生に調査している。その結果、中学生段階では他の年齢段階に比べ、親への愛着歴の表象が対人的構えに及ぼす影響が比較的大きいことが明らかにされた。したがって、特に中学生の愛着を明らかにする際には、現時点での愛着だけではなく、幼少期に形成されていた愛着に対して、現時点でどのような印象を有しているのかを検討することも重要であると考えられる。

さらにBowlby(1969,1973)は、愛着対象を母性的人物(mother figure)とし、必ずしも母親に限定していない。他にも父親、年長の同胞、祖父母などの存在が考えられ、それらを含めた中から主要な愛着人物と二次的愛着人物(subsidiary attachment figures)を選ぶとされている。近年、女性の意識やライフスタイルの変化から、父親の育児参加が注目されている。西本(2001)は、大学生を対象に父親・母親への愛着と、対人コンピテンスについて調査している。その結果、父親・母親への愛着の構造は変わらないが、父親に対する信頼感や尊敬、疎外感や孤立と、母親のコミュニケーションを通じた自己開示が、対人コンピテンスに影響を及ぼすことを明らかにした。また、先に検討した酒井ら(2002)でも、父親と母親では学校適応感への影響に違いがあることを明らかにしている。このように、父親は母親とは異なった役割を果たす可能性が高く、不登校傾向についても、父親との関係は重要な問題である。しかし、これまで全体的に父子関係についての研究は少なく、特に不登校傾向の多様な側面との関連について実証されたものは見当たらない。さらに、中学生自身が父母間の幼少期における愛着について、どの程度一致していると感じていたか否かという点などについても言及されていない。

以上のことから、本研究では、不登校傾向の生徒に対する理解と適切な援助を、愛着の視点から検討する。不登校との関連を考慮し、発達段階的に最も不登校が出現しやすいと考えられ、統計的にも確認されている中学生を対象とする。その際、不登校傾向を近年増加しているタイプをも含めて検討し、多様な状態像との関連を検討することとする。また、愛着理論や佐藤(1993)の指摘を踏まえ、幼少期の親への愛着による表象を重要視し、回想法による回答を求めることとする。さらに、父親・母親への愛着とその相違に注目し、不登校傾向に及ぼす影響について検討を行う。これにより、幼少期からの親子への援助の重要性を指摘できるものと考えられる。

方法

対象者

A県内の2つの公立中学校1年生189名(男子112名, 女子77名), 2年生159名(男子87名, 女子72名), 3年生132名(男子65名, 女子67名)で, 合計480名。平均年齢は男子13.75歳, 女子13.85歳であった。

調査時期と手続き

2003年2月中旬～下旬に各学級で学級担任が一斉に実施し, その場で回収された。

質問紙

フェイスシートで性別, 学年, 年齢について尋ねた後, 以下の59項目について回答を求めた。

(1) **不登校傾向** 五十嵐・萩原(2002)の不登校傾向尺度を一部修正した13項目を用いた。修正にあたっては, 教育臨床学の専門家1名, 教育臨床学専攻の大学院生5名, 中学教師2名に内容的妥当性およびワーディングに関する検討を依頼した。「あてはまる」～「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。また, 不登校傾向尺度の基準連関妥当性を検討するために, 古市(1994)の学校享受感尺度(10項目)についても4件法で回答を

求めた。

(2) **幼少期の親への愛着** 佐藤(1993)の親への愛着尺度を調査対象者の負担を考慮して一部の項目表現を修正した18項目を用いた。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で父親と母親それぞれについて回答を求めた。佐藤(1993)は小学生時の親への愛着を尋ねているが, 本研究では「幼い頃」と教示して, 回想法によって思春期時点での幼少期の愛着を把握することとした。

結果

1. 各変数の構造と基本統計量および性差・学年差

(1) **不登校傾向尺度の構造** 各変数の構造を明らかにするために, 因子分析を行うこととした。

まず, 不登校傾向について項目分析を行ったところ, 全ての項目において $r=.70$ 以上の相関は認められなかった。また, 度数分布の偏りも認められなかったため, 全項目による因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(TABLE 1)。

第I因子は, 「学校に行っても, 保健室や相談室ですごしたい」「学校では, 授業より, 保健室や相談室の先

TABLE 1 不登校傾向尺度の因子パターン(プロマックス回転後)と学校享受感尺度との相関

	I	II	III	IV	共通性
I 別室登校を希望する不登校傾向 ($\alpha=.83$)					
学校に行っても, 保健室や相談室ですごしたい	.86	-.03	-.04	.07	.73
学校では, 授業より, 保健室や相談室の先生と話したい	.75	.03	.07	-.10	.57
教室に行かなくても保健室や相談室で勉強できればいいと思う	.73	.10	-.02	.03	.61
II 遊び・非行に関連する不登校傾向 ($\alpha=.72$)					
学校へ行ったり家にいたりするより, それ以外の場所で友達とずっと遊んでいたい	.04	.83	-.05	-.27	.54
学校に行かず, 家で友達と遊んでいたい	.02	.67	-.14	.36	.71
学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより, 友達の家で過ごす方が楽しい	.07	.56	.04	-.12	.31
夜おそくまで外で遊んでいて, 学校に行くのがつらいと思うことがある	-.05	.43	.23	.01	.30
III 精神・身体症状を伴う不登校傾向 ($\alpha=.72$)					
少しのことで気分が落ち込み, 学校に行くのがつらい	.04	-.01	.74	.03	.61
学校に行くと, 誰かに悪口を言われているような気がしてこわい	-.07	.03	.70	-.19	.36
学校に行くことを考えたら, 頭が痛くなったり, 気持ちが悪くなったりすることがある	.17	-.13	.59	.13	.54
学校に行ってしまうと楽しいが, それまでは行きたくないと思っている	-.02	.22	.43	.11	.38
IV 在宅を希望する不登校傾向 ($\alpha=.57$)					
先生や友達と会いたいので, 家にいるより学校に行きたい	-.05	.24	.10	-.67	.33
学校に行かず, 家でゲームをしてすごせたらと思う	-.10	.17	.09	.53	.40
因子間相関	I	—	.36***	.48***	.36***
	II		—	.35***	.58***
	III			—	.37***
	IV				—
学校享受感尺度との相関					-.40***
					-.29***
					-.40***
					-.60***

*** $p < .001$

生と話したい」など、登校しても教室以外の場所で学校生活を送りたい気持ちを示していると考えられるため、「別室登校を希望する不登校傾向」と命名した。

第II因子は、「学校へ行ったり家にいたりするより、それ以外の場所で友達とずっと遊んでいたい」「学校に行かず、家で友達と遊んでいたい」など、友人との遊びや深夜徘徊などの行動のために学校へ行きたくないと感じていることを示していると考えられるため、「遊び・非行に関連する不登校傾向」と命名した。

第III因子は、「少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらい」「学校に行くと、誰かに悪口を言われているような気がしてこわい」など、精神症状や身体症状を随伴している状態を示すと考えられるため、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」と命名した。

第IV因子は、「先生や友達と会いたいの、家にいるより学校に行きたい（逆転項目）」「学校に行かず、家でゲームをしてすごせたらと思う」など、学校へ行くよりも家にいたいという気持ちを示していると考えられるため、「在宅を希望する不登校傾向」と命名した。なお、第IV因子では、第II因子に含まれる「学校に行かず、家で友達と遊んでいたい」という項目が因子負荷量.35以上の基準で重複して負荷した。これは友人との遊びについての項目であるが、第II因子の他の項目とは異なり、自宅での遊びについて言及しているため、第IV因子にも負荷すると考えた。

因子間相関は $r = .35 \sim .58$ であった。また、 $\alpha = .57 \sim .83$ であった。第IV因子においてやや信頼性が低く、今後の検討が必要である。

また、学校享受感尺度との相関係数を算出したところ、全ての因子において弱～中程度の負の相関が認められた。したがって、不登校傾向尺度の基準連関妥当性は認められたと考えられる。

(2) 幼少期の親への愛着尺度の構造 次に幼少期の親への愛着について因子分析を行うこととした。

まず、父親について、度数分布に偏りがあった1項目を除いた17項目による因子分析を行い、因子負荷量.35以上の基準でどの因子にも負荷しない項目が見られたため、それら3項目を除外して再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(TABLE 2)。

第I因子は、「外であったできごとをよく親に話した」「親にはげましてもらって元気が出た」など、親との安心した依存的関係を形成していたことに関連すると考えられるため、「安心・依存」と命名した。

第II因子は、「親は、私のちょっとしたことで、よく気分を害した」「親のことを、きらいだと思うことがあった」など、親への拒否的な態度や不信感を示していると考えられるため、「不信・拒否」と命名した。

第III因子は、「親がそばについていてくれないと不安だった」「親からはなれてひとりで行動するのはこわかった」など、親からの分離不安を示していると考え

TABLE 2 父親への愛着尺度の因子パターン (プロマックス回転後)

	I	II	III	共通性
I 安心・依存 ($\alpha = .83$)				
外であったできごとをよく親に話した	.77	.16	.05	.50
親にはげましてもらって元気が出た	.75	.04	.07	.59
心配事やなやみがあるとき、それを親に話した	.72	.09	.00	.43
親は私の良い面も悪い面もわかってくれていた	.69	-.10	-.07	.52
親のことが好きだった	.44	-.22	.24	.57
II 不信・拒否 ($\alpha = .73$)				
親は、私のちょっとしたことで、よく気分を害した	.06	.67	.01	.39
親のことを、きらいだと思うことがあった	-.07	.65	-.06	.52
親が変わってほしいと思うことがあった	.27	.61	-.10	.26
親は、私の本当の気持ちをわかっていなかった	-.27	.52	.15	.46
親からあまり好かれていないように感じるものがあつた	-.20	.50	.17	.35
III 分離不安 ($\alpha = .68$)				
親がそばについていてくれないと不安だった	.04	-.02	.74	.60
親からはなれてひとりで行動するのはこわかった	-.08	-.06	.71	.47
できれば、親とだけ、いつもいっしょにいたいと思った	.16	-.11	.45	.38
親や家族以外の人とは、いっしょにいても落ち着かなかつた	.08	.26	.37	.16
因子間相関	I	—	.50***	.49***
	II	—	-.24***	—
	III	—	—	—

*** $p < .001$

られるため、「分離不安」と命名した。

因子間相関は $r = -.50 \sim .49$ であり、信頼性については $\alpha = .68 \sim .83$ と第III因子でやや低かった。

幼少期の母親についても同様に因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ、父親とほぼ同様の構造が認められた。すなわち、父親への愛着における「安心・依存」の「親のことが好きだった」のかわりに「親に何か相談したり、親の意見を聞いたりすることは少なかった(逆転項目)」が負荷したが、それ以外の項目に違いはなく、全体的な構造にもまったく違いが認められなかった。これは、西本(2001)でも父母の構造は同様であることが確認されている。また、佐藤(1993)では父、母ごとに結果を示していない。そこで、本研究では父親との比較を行うために、母親への愛着下位尺度得点は父親の構造を基準に算出することとした。この場合の母親への愛着の下位尺度間相関は $r = -.46 \sim .40$ であり、 $\alpha = .66 \sim .81$ であった。

(3) 各変数の性差・学年差 次に、不登校傾向、幼少期の父親および母親への愛着それぞれの下位尺度の基本統計量と性差・学年差を算出した(TABLE 3)。

性別と学年を要因とする2要因分散分析の結果、不登校傾向については、「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」において性の主効果が認められ、「別

室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」においては女子、「在宅を希望する不登校傾向」においては男子の得点がそれぞれ高いことが示された。また「遊び・非行に関連する不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」において学年の主効果が認められた。交互作用はいずれも認められなかった。

幼少期の父親への愛着については、「安心・依存」において交互作用が認められた。単純主効果を分析したところ、性の要因では2年生で有意であった($p < .01$)。また、学年の要因は男子で有意であり($p < .01$)、3年生より2年生の得点が高かった。「不信・拒否」でも交互作用が認められ、単純主効果の分析を行ったところ、性の要因では2年生で有意であった($p < .05$)。学年の要因では男女とも有意であり($p < .05$)、男子では3年生の得点が他の学年に比べて最も高く、女子では1年生より2年生の得点が高かった。「分離不安」では学年の主効果が認められ、Tukey法による多重比較の結果、3年生の得点が他の学年に比べて最も低かった。

幼少期の母親への愛着については、「安心・依存」において交互作用が認められた。単純主効果を分析したところ、性の要因では1年生($p < .01$)および3年生($p < .001$)で有意であった。学年の要因では男子で有意であり($p < .05$)、3年生より2年生の得点が高かった。「不信・拒否」でも交互作用が認められ、単純主効果の分

TABLE 3 各変数の基本統計量と性差・学年差

	男子			女子			主効果		交互作用 F 値
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	性別 F 値	学年 F 値	
	M (SD)	M (SD)							
【不登校傾向】									
別室登校を希望する 不登校傾向	1.41(.68)	1.33(.61)	1.34(.59)	1.65(.88)	1.62(.85)	1.51(.72)	11.59***	.84	.27
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.40(.78)	2.41(.75)	2.36(.74)	2.31(.72)	2.53(.76)	2.21(.70)	.37	2.37†	1.35
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.67(.67)	1.82(.69)	1.88(.59)	2.05(.77)	1.90(.73)	2.07(.68)	11.11***	1.35	1.97
在宅を希望する 不登校傾向	2.57(.84)	2.44(.67)	2.30(.79)	2.31(.73)	2.37(.73)	2.18(.80)	4.58*	2.86†	.76
【父親への愛着】									
安心・依存	3.09(.90)	3.33(.80)	2.85(.78)	3.17(.93)	2.95(1.10)	3.03(.91)	.23	2.13	4.06*
不信・拒否	2.75(.81)	2.80(.78)	3.14(.85)	2.73(.87)	3.08(.97)	2.93(.91)	.05	4.93**	3.07*
分離不安	2.30(.81)	2.35(.80)	1.99(.75)	2.42(.90)	2.31(.92)	2.21(.83)	1.52	4.06*	.83
【母親への愛着】									
安心・依存	3.27(.84)	3.44(.86)	3.08(.73)	3.63(.89)	3.53(.99)	3.69(.78)	19.26***	.53	3.29*
不信・拒否	2.75(.81)	2.77(.80)	3.13(.84)	2.74(.89)	3.02(.97)	2.86(.87)	.02	3.25*	3.28*
分離不安	2.37(.78)	2.28(.80)	2.05(.75)	2.61(.97)	2.47(.90)	2.50(.87)	13.79***	2.45†	.89

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

析を行ったところ、性の要因では2年生と3年生で有意な傾向が見られた($p < .10$)。学年の要因では男子で有意であり($p < .05$)、3年生の得点が他の学年に比べて最も高かった。「分離不安」では性および学年の主効果が認められた。学年について Tukey 法による多重比較を行ったが、有意な結果は得られなかった。

以上の分析より、性別によって不登校傾向に顕著な差があることが示された。また、幼少期の父母への愛着についても、性と学年による交互作用が認められた。そこで、以降の分析では性別ごとの詳細な検討を行うこととした。

2. 不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連

不登校傾向下位尺度と幼少期の父親および母親への愛着との関連を検討するために、男女別に相関係数を算出した (TABLE 4)。

その結果、「別室登校を希望する不登校傾向」については、女子では父母、男子では母への「安心・依存」「不信・拒否」と有意な関連が認められた。また、男子では父母への「分離不安」にも有意な関連が認められた。「遊び・非行に関連する不登校傾向」については、男女ともに父母への「安心・依存」「不信・拒否」と有意な関連が認められた。「精神・身体症状を伴う不

登校傾向」については、男女ともに父母への「不信・拒否」「分離不安」と有意な関連が認められたが、そのうち女子の父親への「分離不安」は有意な関連はなかった。「在宅を希望する不登校傾向」については、男子は母親への「安心・依存」「不信・拒否」が、女子は父親への「安心・依存」「不信・拒否」がそれぞれ有意に関連しており、さらに男子は父親への「安心・依存」が、女子は母親への「分離不安」がそれぞれ有意に関連していた。

このように、不登校傾向下位尺度と幼少期の親への愛着下位尺度との間には、不登校傾向や愛着の違いによって複雑に異なる関連性が存在することが示された。またそれは、親子それぞれの性別によっても異なっているということが明らかになった。その中で共通するのは、異性親に対する「不信・拒否」が全ての不登校傾向と有意な関連を示したことである。また「安心・依存」は負の関連を示すことが多く、「不信・拒否」は正の関連を示すことが多いが、必ずしも関連が認められるわけではなかった。したがって、単に安心感の伴う愛着表象の増加や拒否的な愛着表象の減少が、全ての不登校傾向の低減につながるわけではないことが示唆される。

TABLE 4 不登校傾向と父母への愛着との関連

男子						
	父親への愛着			母親への愛着		
	安心・依存	不信・拒否	分離不安	安心・依存	不信・拒否	分離不安
別室登校を希望する 不登校傾向	-.03	.08	.18**	-.12 [†]	.16*	.17**
遊び・非行に関連する 不登校傾向	-.14*	.15*	.07	-.14*	.21***	.01
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	.00	.22***	.20**	-.07	.26***	.19**
在宅を希望する 不登校傾向	-.12 [†]	.08	.06	-.17**	.16**	.03
女子						
	安心・依存	不信・拒否	分離不安	安心・依存	不信・拒否	分離不安
	別室登校を希望する 不登校傾向	-.22**	.23***	-.01	-.15*	.27***
遊び・非行に関連する 不登校傾向	-.18**	.34***	.00	-.14*	.35***	-.01
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	-.08	.23***	.08	.05	.26***	.18**
在宅を希望する 不登校傾向	-.13 [†]	.13 [†]	.10	-.03	.10	.18**

[†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3. 不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着型との関連

次に不登校傾向下位尺度と幼少期の父母への愛着型との関連を検討することとした。愛着型の分類は、以下の方法で行った。まず、1つの下位尺度得点 - (残り2つの下位尺度得点の和/2) > 0であれば、ある下位尺度得点が残りの下位尺度得点よりも個人内で優位であり、その愛着型を有しているとした。さらに、複数の下位尺度得点が優位である場合、それらの混合型の型を有していると考えて抽出した。

以上の基準で分類を行った結果、「分離不安」のみが優位である者、「不信・拒否」と「分離不安」がいずれも優位である者は少なかったため、分析からは除外することとした。また、「安心・依存」と「不信・拒否」のいずれもが優位な者は、親に対する両価的な愛着を有している者であると考えられるため、「アンビバレント」型と命名し、「安心・依存」と「分離不安」のいずれもが優位な者は、親との一体感を伴う愛着関係を形成していたと考えられるため、「密着」型と命名した。

これらの愛着型による不登校傾向下位尺度の差を検

討するために、男女別、父母別に愛着型を要因とする1要因分散分析を行った (TABLE 5)。その結果、概して男女、父母ともに「安心・依存優位」型である者の不登校傾向下位尺度得点が低かった。特に男子では、母親への愛着が「安心・依存優位」型である者は、どの不登校傾向下位尺度得点も有意に低いという結果が得られた。また不登校傾向下位尺度得点が高いのは、概して「不信・拒否優位」型の者であるが、女子では母親への愛着型が「アンビバレント」である者の「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」得点が有意に高いことが示された。また、男子のみ「不信・拒否優位」型の者の「在宅を希望する不登校傾向」得点が高いことが示された。

4. 不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着のズレの大きさとの関連

さらに、不登校傾向下位尺度と、幼少期の父母への愛着のズレの大きさとの関連を検討することとした。ズレの大きさの分類は、以下の方法で行った。まず、下位尺度ごとに父親と母親の下位尺度得点差を算出し、それを絶対値化して下位尺度ごとのズレ得点を算出し

TABLE 5 男女別の父親および母親への愛着型による不登校傾向下位尺度の差

	父親への愛着型					母親への愛着型						
	A安心優位 n=85(36.2%) M(SD)	B不信優位 n=53(22.6%) M(SD)	Cアンビバレント n=72(30.6%) M(SD)	D密着 n=25(10.6%) M(SD)	F値	多重比較	A安心優位 n=98(40.0%) M(SD)	B不信優位 n=48(19.6%) M(SD)	Cアンビバレント n=74(30.2%) M(SD)	D密着 n=25(10.2%) M(SD)	F値	多重比較
男子												
別室登校を希望する 不登校傾向	1.22(.47)	1.44(.74)	1.34(.64)	1.32(.42)	1.62		1.22(.43)	1.42(.77)	1.47(.74)	1.29(.48)	2.59*	C > A
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.29(.75)	2.63(.66)	2.33(.80)	2.36(.75)	2.46*	B > A	2.20(.72)	2.56(.73)	2.49(.80)	2.47(.77)	3.46*	BC > A
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.66(.62)	1.91(.63)	1.73(.67)	1.72(.72)	1.63		1.63(.58)	1.96(.65)	1.78(.67)	1.94(.83)	3.62*	B > A
在宅を希望する 不登校傾向	2.45(.78)	2.72(.80)	2.31(.80)	2.33(.70)	3.01*	B > C	2.33(.73)	2.72(.90)	2.50(.78)	2.40(.76)	2.72*	B > A
女子												
別室登校を希望する 不登校傾向	1.40(.73)	1.80(1.01)	1.53(.72)	1.39(.50)	3.32*	B > AD	1.44(.75)	1.68(1.02)	1.76(.89)	1.43(.59)	2.07	
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.23(.65)	2.55(.80)	2.18(.74)	2.19(.68)	3.35*	B > AC	2.20(.65)	2.53(.90)	2.54(.76)	2.22(.73)	3.19*	C > A
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.85(.63)	2.12(.82)	2.07(.76)	1.93(.67)	1.74		1.85(.64)	1.87(.78)	2.24(.81)	2.04(.73)	3.41*	C > A
在宅を希望する 不登校傾向	2.18(.66)	2.39(.81)	2.20(.76)	2.17(.70)	1.12		2.20(.72)	2.23(.81)	2.35(.76)	2.41(.81)	.80	

*p < .10 *p < .05

た。次に、その下位尺度ごとにズレ得点の平均値を算出し、平均値よりズレ得点が高い場合を父母ズレあり群、小さい場合を父母一致群とした。さらに、父母ズレあり群については、父母のどちらの得点が高いかによって父>母群と父<母群に分類した。また父母一致群については、それぞれの下位尺度得点とその平均値よりも父母ともに高い場合を父母一致高群、ともに低い場合を父母一致低群として分類した。

以上の基準で分類を行った結果、「安心・依存」については父>母群の者が少なかったため、父<母群とともに父母ズレあり群として分析を行った。

これらのズレによる不登校傾向下位尺度得点の差を

検討するために、男女ごとにズレを要因とする1要因分散分析を行った（TABLE 6）。その結果、「安心・依存」のズレについては、男子では不登校傾向とは関連が示されなかった一方、女子では父母一致高群の「別室登校を希望する不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」得点が有意に低い傾向にあることが認められた。また、「不信・拒否」のズレについては、男子では「別室登校を希望する不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」において、父母一致高群の得点が父母一致低群の得点よりも有意に高いことが示された。女子では、「遊び・非行に関連する不登校傾向」については男子と同様の

TABLE 6 不登校傾向と父母への愛着のズレとの関連

	男子				F 値	多重比較	女子				F 値	多重比較
	A 父>母群 n=55(24.2%) M(SD)	B 父<母群 n=76(33.5%) M(SD)	C 父母一致高群 n=96(42.3%) M(SD)	D 父母一致低群 n=93(37.1%) M(SD)			A 父>母群 n=91(48.4%) M(SD)	B 父<母群 n=61(32.4%) M(SD)	C 父母一致高群 n=36(19.1%) M(SD)	D 父母一致低群 n=73(36.0%) M(SD)		
安心・依存												
別室登校を希望する 不登校傾向	1.35(.58)	1.31(.61)	1.45(.69)	1.06		1.71(.90)	1.41(.73)	1.64(.85)	2.47*	A > B		
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.43(.81)	2.32(.82)	2.47(.69)	.85		2.32(.73)	2.21(.68)	2.58(.86)	2.82*	C > B		
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.83(.63)	1.77(.77)	1.77(.59)	.15		2.13(.74)	1.93(.68)	1.90(.78)	1.97			
在宅を希望する 不登校傾向	2.38(.86)	2.38(.79)	2.59(.78)	1.92		2.30(.77)	2.22(.71)	2.36(.75)	.41			
不信・拒否												
別室登校を希望する 不登校傾向	1.29(.51)	1.45(.72)	1.55(.82)	1.24(.43)	3.96**	C > D	1.67(.92)	1.89(.94)	1.63(.81)	1.35(.66)	4.16**	B > D
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.32(.78)	2.53(.75)	2.59(.72)	2.23(.73)	3.91**	C > D	2.34(.83)	2.43(.75)	2.51(.76)	2.17(.65)	2.28*	C > D
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.83(.65)	1.86(.70)	1.92(.69)	1.61(.60)	3.55*	C > D	2.25(.75)	2.26(.79)	1.90(.71)	1.75(.62)	6.95***	AB > CD
在宅を希望する 不登校傾向	2.30(.89)	2.52(.92)	2.57(.74)	2.42(.72)	1.28		2.33(.81)	2.34(.85)	2.37(.65)	2.17(.73)	.91	
分離不安												
別室登校を希望する 不登校傾向	1.30(.49)	1.41(.60)	1.53(.74)	1.26(.59)	2.90*	C > D	1.81(.81)	1.60(.84)	1.57(.75)	1.54(.90)	.42	
遊び・非行に関連する 不登校傾向	2.76(.67)	2.33(.67)	2.39(.73)	2.33(.81)	2.84*	A > BCD	2.50(.75)	2.31(.69)	2.35(.73)	2.30(.79)	.30	
精神・身体症状を伴う 不登校傾向	1.91(.63)	1.82(.58)	1.90(.75)	1.64(.61)	2.97*	C > D	2.30(.69)	2.19(.71)	1.95(.78)	1.71(.63)	6.02***	AB > D
在宅を希望する 不登校傾向	2.63(.82)	2.50(.78)	2.56(.75)	2.35(.80)	1.60		2.55(.94)	2.33(.76)	2.37(.69)	2.07(.72)	2.56*	

* $p < .10$ ** $p < .05$ *** $p < .01$ **** $p < .001$

結果であったが、「別室登校を希望する不登校傾向」については父母一致低群よりも父>母群の得点が、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」については父母一致群よりも父母にズレがある群の得点がそれぞれ有意に高いという結果が得られた。さらに「分離不安」のズレについては、男子では「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」において、父母一致高群の得点が父母一致低群の得点よりも有意に高いことが示されたほか、「遊び・非行に関連する不登校傾向」においては、父>母群の得点が最も高いという結果が得られた。女子では、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」において、父母一致低群よりも父母にズレがある群の方が得点が高いことが示された。

男女、およびいずれの愛着でも、ズレは「在宅を希望する不登校傾向」と関連が認められなかった。また、男女ともに「安心・依存」の父母のズレはあまり不登校傾向とは関連が示されていない。しかし、「不信・拒否」「分離不安」については、男子では概して父母一致高低群間における不登校傾向の差が有意であることが示され、女子では多くが父母のズレがあるか否かによって不登校傾向に差があるという結果が得られた。

考 察

本研究では、中学生における不登校傾向の諸側面と、彼らがとらえている回想法による幼少期の父親および母親への愛着との関連を検討した。

まず、不登校傾向と回想法による幼少期の父母への愛着について性差・学年差を検討したところ、不登校傾向では顕著な性差が示された。本保・佐久川(1993)は、「学校を休みたくなったことがある」者は女子に多いことを示している。しかし、本研究では「遊び・非行に関連する不登校傾向」に性差はないが、「在宅を希望する不登校傾向」は男子、「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」では女子の得点が高いという結果が得られ、不登校傾向の内容の違いによってそのあらわれ方に差が生じることが示された。特に「別室登校を希望する不登校傾向」に関しては、植野・芝木・笹嶋(2003)が、男子の約6倍の割合で女子の保健室登校生徒が発現することを示しており、実際にも本研究と同様の傾向が確認されている。

また、不登校傾向の学年差については、一部で3年生が最も低いという結果が示された。本調査は、3年生にとって、中学校卒業を目前とした時期に実施された。したがって、このような調査時期が影響した可能性も考えられる。他の時期に実施した場合には異なる

結果が得られることも推測されるため、年間を通した変化を明らかにしていく必要がある。

回想法による幼少期の親への愛着は、性と学年による交互作用が認められた。すなわち、父親については、3年生男子および2年生女子の「不信・拒否」得点が高く、3年生男子の「安心・依存」得点と3年生の「分離不安」得点が低いという結果が得られた。また、母親については3年生男子の結果が特徴的であり、「安心・依存」得点が低く、「不信・拒否」得点が高かった。これらの結果は、親への依存を弱め、時には拒否的な態度を表現して自立を図っていくという、思春期の心理的特徴に極めて近い様相を示している。これは、本研究が幼少期の愛着を取り上げながらも、中学生に対する回想法を用いたことに由来すると考えられる。すなわち、本研究の結果として得られた幼少期の愛着は、当時に築かれていた絶対的なもののみを反映しているわけではなく、現時点で想起可能なものであり、また現時点で築かれている親への愛着によって影響を受けていると考えられる。佐藤(1993)はこれを愛着歴と述べているが、本研究でも同様に、思春期時点での幼少期における愛着歴とその表象をとらえているということを踏まえておく必要がある。

また、性差に注目すると、父母ともに、男子では「安心・依存」の得点が2年生で最も高く、「不信・拒否」の得点は学年につれて高まる様相が見て取れる。一方、女子では「安心・依存」は2年生で最も低く、「不信・拒否」は2年生で最も高いことが示された。特に「安心・依存」は、2年生において男女の結果が大きく異なる。このように、本研究ではいくつかの変数において男女による違いが認められたため、以降の分析については、性別ごとに検討する必要があると考えた。

その上で、幼少期の父母への愛着表象と不登校傾向との関連を検討すると、男女や父母、および不登校傾向の違いによってその関連は異なることが示された。それは、中学生期における愛着と様々な適応指標との関連を検討した先行研究(e.g., Jones, Forehand, & Beach, 2000)を支持するものである。しかし、本研究で得られた相関係数は全体的に低かった。したがって、親子間の愛着のみで不登校傾向が左右されるわけではないことをあらためて踏まえておく必要があるが、本研究の結果からは以下のような可能性が考えられる。

具体的に、各不登校傾向別に検討を加えてみると、まず「別室登校を希望する不登校傾向」では、男女ともに母親への「安心・依存」と負の相関もしくは相関傾向が、「不信・拒否」と正の相関が認められた。ま

た、女子では父親とも同様の関連が見られた。「別室登校を希望する不登校傾向」の構成項目を見ると、登校しても教室に行きたくないというだけではなく、保健室や相談室で学校生活を過ごすことを望む気持ちをあらわしている。これはすなわち、教室に居辛さだけではなく、さらに養護教諭やスクールカウンセラーなどによる個別的なかかわりを求めている状態を示すと考えられる。したがって、「別室登校を希望する不登校傾向」を示す生徒は、特に母親への安心感の不足や拒否感の増大といった要因への対処として、養護教諭やスクールカウンセラーなどとの安定した関係性の構築を必要としている可能性がある。特に女子は、両親に同様の関連が認められるため、このような個別的援助による安全感の確保をより必要としているかもしれないが、これらの点については今後の詳細な検討が望まれる。

「遊び・非行に関連する不登校傾向」については、男女ともに父母への「安心・依存」と負の相関が、「不信・拒否」と正の相関が認められた。酒井ら(2002)は、母親への信頼感は中学生の「反社会的傾向」を低減し、父親への信頼感は「教室での反抗的な気分」を低減すると述べている。「反社会的傾向」「教室での反抗的な気分」は、「遊び・非行に関連する不登校傾向」に結びつく可能性が高い。したがって、本研究の結果は酒井ら(2002)を支持すると言える。このような不登校傾向の低減のためには、男女ともに父母双方に対する不信感の少ない安心した愛着を感じられるようになる必要があると考えられる。

次いで、「在宅を希望する不登校傾向」は、主に異性親への「安心・依存」「不信・拒否」との間に相関もしくは相関傾向が認められた。「在宅を希望する不登校傾向」の構成項目を見ると、友人との遊びやゲームなどによって、家で自由な時間を過ごすことに言及しているものが認められる。子どもが、不登校状態のままに家でこのような生活をしていれば、(特にその初期には)親が不安になり、焦りや怒りを感じるのは中学生にも容易に予想される事態であろう。このように「親を困らせること」と親への拒否的な愛着表象が結びついていること、さらにはその背景に安心感の伴う愛着関係の確立についての欲求があることが推測される。

以上の3つの不登校傾向よりも「分離不安」と多くの関連が示されたのが、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」である。分離不安が回想されたということは、安全基地として愛着対象が表象化されることに困難が生じていたこと、その際の不安感が認知され、思春期

に至っても想起可能な状況にあるということを示しているだろう。Mahler & La Perriere (1965) は精神分析の立場から、子どもの分離不安が思春期に持ち越されると、その後の精神病理の要因となりうることを指摘している。「精神・身体症状を伴う不登校傾向」は、従来から神経症タイプと称されてきたものに近い不登校傾向であり、本研究で検討した不登校傾向の中ではより深刻な状態であることから、この結果は Mahler & La Perriere (1965) を支持するものと言える。

また、この「分離不安」は、先に「安心・依存」と正の相関が、「不信・拒否」とは負の相関があることが示されていた。したがって、このような矛盾した状態が、不登校傾向とも何らかの関連を示すのではないかと考えられる。この点を踏まえ、愛着型の違いと不登校傾向との関連についても検討した。その結果、女子の母親への愛着が、安心感と不信感がともに高い状態(「アンビバレント」型)である場合、「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」得点が高いことが示された。近年の母娘関係の特徴として、友人に近い関係性を有することがしばしば指摘される。こうした関係の背景には安定した愛着関係の形成が示唆される一方で、娘は、母親に喜ばれるよう振舞うなどの母親からの拘束感を感じ、時には不適応状態に陥ることが指摘されている(高石,1997;前川,2002)。本研究で認められた「母親に対して安定しながらも不信感を持っている者に不登校傾向が強い」という女子の特徴は、不登校傾向という学校不適応問題について、この臨床的観点からの指摘を支持するものと考えられる。

なお、こうした女子の母親に対する特徴は、先の「精神・身体症状を伴う不登校傾向」と「分離不安」との関連が、女子は母親のみに認められていたことから示唆されることを踏まえておく必要がある。ここから、父母間の異なる作用の可能性が考えられる。そこで、父母間の愛着のズレと不登校傾向との関連について検討したところ、女子はさらに、(愛着の違いによって一様ではないが)父母間の愛着にズレが生じている場合に「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」が高まるという結果が得られた。一方、男子は女子と異なり、ネガティブな愛着得点が父母ともに一致して平均よりも低いと、一致して高い場合よりも不登校傾向は弱まるという結果が得られた。この父母間のズレは、回想法という本研究の方法を踏まえると、当時の絶対的な差のみに基づくものではなく、幼少期からの父母間相互の育児などに対する意識や感

情を、子どもが現時点でどのように認知しているかという点が反映されているものと考えられる。女子は、母親個人内における矛盾した愛着表象をとらえていることが不登校傾向と関連していたことから、家族内におけるこうした情緒的不安定性や矛盾に対する感受性が強く、不登校傾向を感じやすいことが示唆される。今後は、実際の父母評定によってもこのズレを検討し、不登校傾向との関連性をより詳細に、性差も含めて明らかにしていく必要がある。

一方、男子において特徴的なのは「在宅を希望する不登校傾向」であり、男子の得点が有意に高かった。また、女子では「在宅を希望する不登校傾向」と愛着型との関連は認められなかったが、男子は父母ともに不信・拒否優位の型を有していた者の「在宅を希望する不登校傾向」得点が高いことが示された。青年期以降の社会的ひきこもりについて斎藤(1998)は、男子の出現率が圧倒的に高く、しばしば親の些細な言動や幼児期からの育児について、親へ恨みを述べることを示している。不登校に至った者すべてが社会的ひきこもりの状態に陥るわけではなく、本研究で測定した中学生の「在宅を希望する不登校傾向」の延長線上に、後の青年期における社会的ひきこもりがあるとは言えない。しかし、本研究で示された結果は青年期以降の社会的ひきこもりに関する斎藤(1998)の指摘に一致しており、登校しながらも在宅を希望している男子の中に、思春期時点ですでに同様の傾向が示されていることは興味深い。今後は、本研究で認められた結果が、実際に不登校に至った場合にいかなる変化を示すのか、また予後の状態とどのような関連があるのかについて検討する必要がある。

以上のように、本研究では中学生の不登校傾向について、幼少期の父親および母親への愛着に焦点をあてて検討した。しかし、不登校はその他にも自己像など多くの複雑な要因が関連しあって発生する、と指摘されている(永井,1996)。したがって、これらの要因間の関連性を実証的に検討していくことも、今後の課題として求められるだろう。また、調査対象者の年齢層を広げ、本研究の結果が中学生に特徴的な結果であるのかを明らかにする必要がある。また、青年期における愛着の質やスタイル、対象の変化などを踏まえ、それらとの関連について詳細に検討を加える必要がある。

引用文献

- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss : vol.1. Attachment*. London : The Hogarth Press. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子(訳) 1976 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss : vol.2. Separation : Anxiety and anger*. London : The Hogarth Press. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子(訳) 1977 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社
- 古市裕一 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, **96**, 105-113.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2002 中学生における不登校傾向に関する研究(1)—不登校傾向尺度の開発— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 275.
- 石川瞭子 2000 不登校と父親の役割 青弓社
- Jones, D.J., Forehand, R., & Beach, S.R.H. 2000 Maternal and paternal parenting during adolescence : Forecasting early adult psychosocial adjustment. *Adolescence*, **35**, 513-530.
- Jong, M.L. 1992 Attachment, individuation, and risk of suicide in late adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **21**, 357-373.
- 烏丸佐知子 2001 青年の抑うつと母親への愛着認識の関連性について—高校生の質問紙調査から 京都女子大学紀要, **41**, 60-73.
- 粕谷貴志・菅原正和 2001 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, **11**, 137-145.
- 小泉英二 1973 登校拒否—その心理と治療 学事出版
- 小泉英二 1988 教育相談の立場からみた不登校の問題 児童青年精神医学とその近接領域, **29**, 359-366. (Koizumi, E. 1988 The problem of non-attendance at school as seen from the standpoint of psychological and counseling services in the field of education. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, **29**, 359-366.)
- Koon, J.O. 1997 Attachment to parents and peers in late adolescence and their relationship with self-image. *Adolescence*, **32**, 471-482.
- 前川あさ美 2002 友だちのような親子関係 児童心理, **56**, 1510-1514.
- Mahler, M.S., & La Perriere, K. 1965 Mother-child interaction during separation-individuation. *Psychoanalytic Quarterly*, **34**, 483-498.
- 文部省生徒指導研究会編 1988 登校拒否の指導・相

談事例集 第一法規

- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- 本保恭子・佐久川肇 1993 中学生の不登校願望に関する意識調査 小児の精神と神経, **33**, 283-290. (Motoyasu, K., & Sakugawa, H. 1993 The questionnaire investigation concerning junior high school students' hope of school refusal. *Psychiatria et Neurologia Paediatrica Japonica*, **33**, 283-290.)
- 永井 徹 1996 不登校の心理—カウンセラーの立場から— サイエンス社
- 西本幹子 2001 青年期における父親・母親に対する愛着関係と対人コンピテンスに関する研究 追手門学院大学心理学論集, **9**, 1-9.
- 岡部彩子 2001 愛着スタイル別にみた中学生の親子関係と友達関係 人間文化論叢, **4**, 269-279.
- 斎藤 環 1998 社会的ひきこもり：終わらない思春期 PHP 研究所
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22. (Sakai, A., Sugawara, M., Maeshiro, K., Sugawara, K., & Kitamura, T. 2002 Parent-child relations of mutual trust, trust in one's best friend, and school adjustment : Junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 12-22.)
- 酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9**, 59-70. (Sakai, A. 2001 Young

adult relationship and preschool mother-child attachment : Development of an internal working model scale. *Japanese Journal of Personality*, **9**, 59-70.)

- 佐藤朗子 1993 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, **40**, 215-226.
- 高石浩一 1997 母を支える娘たち：ナルシズムとマゾヒズムの対象支配 日本評論社
- 植野理恵・芝木美沙子・笹嶋由美 2003 北海道の高校における保健室登校の実態と教育的対応 学校保健研究, **45**, 156-166. (Ueno, R., Shibaki, M., & Sasajima, Y. 2003 The investigation concerning "students' spending time in school health room due to classroom refusal" and educational care at high schools in Hokkaido. *Japanese Journal of School Health*, **45**, 156-166.)
- Zimmermann, P., & Becker-Stoll, F. 2002 Stability of attachment representations during adolescence : The influence of ego-identity status. *Journal of Adolescence*, **25**, 107-124.

謝 辞

本研究をまとめるにあたって御指導いただきました、筑波大学教育学系・庄司一子先生に心より感謝申し上げます。また調査実施に際して御協力いただきました中学校の先生方ならびに生徒の皆様に厚く御礼申し上げます。

(2003.9.2 受稿, '04.4.22 受理)

Junior High School Students' Tendency Toward Non-Attendance at School and Attachment in Early Childhood

TETSUYA IGARASHI (DOCTORAL PROGRAM IN EDUCATION, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND HISAKO HAGIWARA (SCHOOL COUNSELOR, HIROSHIMA PREFECTURE AND THE CITY OF HIROSHIMA) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2004, 52, 264-276

The relation between junior high school students' tendency toward non-attendance at school and their attachment for their parents in early childhood was examined through the responses of 480 junior high school students on a questionnaire. The main results were as follows: (1) The students who tended to go to school except to regular classes reported less secure attachment for their mothers. Those who tended to like having fun or engaging in delinquent activities reported less close attachment for their parents. Those who preferred to stay at home reported less strong attachment for their parents. Those who preferred to stay at home reported less strong attachment for the parent of the opposite gender. Moreover, students with psychological or physical symptoms reported more separation anxiety. (2) The girls who were classified as ambivalent toward their mother, or who had a different level of attachment for each parent, reported these tendencies strongly. The girls' results were different from those reported by the boys. These results suggest that girls are more sensitive than boys to emotional instability in their family. (3) In the boys, preferring to stay at home was related to avoiding their parents. These results also showed much the same patterns of social withdrawal as after adolescence.

Key Words : tendency toward non-attendance at school, attachment, early childhood, junior high school students